

漢字文化圏における標準字体の形成とその推移及び 影響に関する研究

－ HNG を利用して －

学位論文内容の要旨

本論文は石塚晴通氏の提唱する漢字字体の変遷モデル（以下「石塚字体変遷モデル」と呼ぶ）を、漢字字体規範データベース（Hanzi Normative Glyphs、略称HNG）を利用して検証し、漢字文化圏における標準字体の形成とその推移及び影響を論じたものである。石塚字体変遷モデルでは、中国初唐期（618-712）に楷書の標準字体（以下「初唐標準」と呼ぶ）が形成されるが、開成石経（837 年）で標準字体が大きく変化し宋代の印刷物（宋版）で開成石経の新しい標準字体（以下「開成標準」と呼ぶ）が普及定着すると考える。一方、日本では初唐標準が日本的標準として定着し、開成標準・宋版の影響は少なく、大きな変化は江戸時代以降であるとする。本論文はこの字体変遷モデルを土台として、どの字について字体の変遷が起こったのか、また字体の変遷の起こる割合はどの程度であるかを実証的数量的に明らかにし、それに基づいて日本への影響を具体的資料に即して論じたものである。

1 章では研究の背景と、漢字字体の調査に用いた漢字字体規範データベース（同編纂委員会、代表・石塚晴通）についてその概要を述べている。

2 章は初唐標準と開成標準との比較を行う。初唐標準の資料として長安宮廷写経（671-677 年）を、開成標準の資料として開成石経（837 年）を用い、この二つの資料の間でどの字について字体の差異が確認できるか、また字体の差異はどの程度の割合で見られるのか、を調査・考察する。調査方法は、初唐の長安宮廷写経（以下「初唐資料」と呼ぶ）3 点のそれぞれについて、開成石経資料 1 点（『論語』、以下「開成論語資料」と呼ぶ）に見られる全ての字体を比較し、両者で字体が一致するものと両者で字体が異なるものとに分類する。その結果、初唐資料と開成石経資料とでは、異なり字数で 3～4 割程度の字体の違い、延べ字数は 3 割程度の字体の違いがあることを明らかにした。

次に、初唐資料 3 点と開成論語資料とに共通して出現する字について、初唐資料と開成論語資料とで完全に字体が異なるもの 59 字を示す。さらに、初唐資料 3 点と開成論語資料とが同じ字体の例について、漢字字体規範データベースで公開されている資料全体で字体が変わるか否かを調査し、7 割について漢字字体規範データベース全体で字体が同じであるとの結果を得た。つまり今回調査の初唐資料と開成論語資料とを「初唐標準」と「開成標準」として述べれば、これら二つの標準字体には、字体差が見られないものが 6 割、字体差が見られ

る例が4割であることが判明した。さらに字体差が見られないもの6割のうち4割が歴史的・地域的に字体が変わらないこと、残り2割が「初唐標準」と「開成標準」以外で字体差が見られることも判明した。

3章では、開成論語資料と宋版資料を用い、「開成標準」の宋版資料での字体の定着について調査・考察を行う。調査方法は初唐資料と開成論語資料とで字体を比較した際と同じ方法を取り、宋版において「開成標準」がどの程度定着していったのかを調査する。開成論語資料と宋版資料の比較では、開成論語資料と宋版資料とを1点ずつ比較し、両者で字体が一致する字と両者で字体が異なる字との分類を行った。さらに両者で字体が一致する割合を調査し、開成石経資料と宋版資料とで字体が一致するのはどの程度であるかを調査した。また開成論語資料と9点の宋版資料とを一度に比較し、複数の資料で用例が確認できる字について「開成標準」が共通して現れるか否かを調査した。調査の結果、開成論語資料と宋版資料とでは8割以上の字体の一致が見られた。また、2章で取り上げた「初唐標準」と「開成標準」とで字体が変わったと考えられる例を対象に字体調査を行うと、宋版資料ではほとんどで「初唐標準」より「開成標準」が書かれていることが確認できた。

4章では、「初唐標準」と「開成標準」とで字体が異なる典型例と考えられる字について、初唐標準と開成標準の字体を奈良～鎌倉期の日本資料でどの程度確認できるか調査・考察した。2章で取り上げた「初唐標準」と「開成標準」とで字体が変わったと考えられる例を対象に字体を確認した結果、日本資料ではほとんどの資料で「開成標準」より「初唐標準」が書かれているということが確認できた。ただし『教行信証』は「開成標準」が相当に用いられており、宋版の影響が認められた。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 池 田 証 壽
副 査 教 授 小 野 芳 彦
副 査 准教授 松 江 崇

学 位 論 文 題 名

漢字文化圏における標準字体の形成とその推移及び 影響に関する研究

－ HNG を利用して －

本論文は石塚晴通氏の提唱する漢字字体の変遷モデル（以下「石塚字体変遷モデル」と呼ぶ）を、漢字字体規範データベース（Hanzi Normative Glyphs、略称HNG）を利用して検証し、漢字文化圏における標準字体の形成とその推移及び影響を論じたものである。石塚字体変遷モデルでは、中国初唐期（618-712）に楷書の標準字体（以下「初唐標準」と呼ぶ）が形成されるが、開成石経（837 年）で標準字体が大きく変化し宋代の印刷物（宋版）で開成石経の新しい標準字体（以下「開成標準」と呼ぶ）が普及定着すると考える。一方、日本では初唐標準が日本的標準として定着し、開成標準・宋版の影響は少なく、大きな変化は江戸時代以降であるとする。本論文はこの字体変遷モデルを土台として、どの字について字体の変遷が起こったのか、また字体の変遷の起こる割合はどの程度であるかを実証的数量的に明らかにし、それに基づいて日本への影響を具体的資料に即して論じたものである。

本論文の研究成果は次の 4 点に要約できる。

第一に、石塚字体変遷モデルの妥当性を検証した上で、「初唐標準」と「開成標準」とどのような字体が異なるのか、その実態を具体的に記述したことである。特に両者で相違する 59 の字体は、古い楷書と新しい楷書の典型例を提示したもので、従来漠然ととらえていた新旧の楷書の差異を（書道史の観点でなく）言語史の観点から明確化したものである。とりわけ漢文古写本の年代判定に有益である。第二に、「初唐標準」と「開成標準」、さらに宋版その他の資料において、どれくらいの字体が同じであったのかを数量的に明確にした点である。これは第一の成果の裏返しとなるが、「初唐標準」と「開成標準」とで同じ字体のものは異なり字数で 6 割であること、この 6 割のうち 4 割が歴史的・地域的に変化のないことを解明した点は大きな成果である。楷書は、本論文が対象とした中国の宋版及び日本の鎌倉時代写本以後も変遷し、現代にいたるものであって、その変遷を跡付ける基準を提示したことになり、漢字字体史研究の可能性を大きく開拓したと評価できる。第三には、「開成標準」が宋版で普及実践される実態を数量的に明確にしたことである。「開成標準」と宋版との漢字字体の一致

率は8割であり、残る2割は「初唐標準」を残すか、避諱による欠画か、「開成標準」の微細な字体を反映しなかったかであることを明らかにしている。第四に、奈良時代から鎌倉時代までの日本資料は、一部の例外（『教行信証』）を除いて「初唐標準」を反映することを具体的に論証したことである。

上述のように本論文はこれまでの漢字字体史の研究の水準を大きく超えるものであって、漢字字体規範データベースを利用した、初めての大きな研究成果と評価できる。

ただし、漢字字体規範データベースには64の資料を対象としているが、本論文が取り上げた資料がこのデータベースの中でどのような性格を持つものであるかの説明が不十分であるため、出された具体的調査結果の持つ重要性が理解しにくくなっている。また、典籍の性格および反映する言語の時代差が字体の選択に影響することも十分考えられる（例えば「爾」は初唐資料と開成論語資料とでは字体が異なる場合があるが、前者の資料である『妙法蓮華經』では指示詞（その・そのような）の用法が優勢で、後者の資料である『論語』では二人称代名詞（なんじ）の用法が優勢と用法に偏りがある）。また石塚字体変遷モデルの実証に重点を置いたため、例外の説明と解釈に慎重すぎる点がある。とは言え、個々の漢字の字体の認定は、厳格なものであり、データの信頼性は極めて高い。本論文に示された漢字字体研究の方法は画期的と言えるものであって、今後この分野の研究にとって必須の研究論文となるであろう。なお本研究の成果は、訓点語学会、計量国語学会等において発表し、学会誌に掲載されており、一定の評価を得ていることを付記しておきたい。

以上の審査結果から、本審査委員会は、全員一致で本学位申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると判断した。